



TITLE:

經濟本質論(一)

AUTHOR(S):

石川, 興二

CITATION:

石川, 興二. 經濟本質論(一). 經濟論叢 1933, 37(1): 37-54

ISSUE DATE:

1933-07-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/130333>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號 一 第

卷七十三第

行發日一月七年八和昭

論 叢

經濟政策の根本義 法學博士 神戶 正雄
資本形成の自動性について 文學博士 高田 保馬
經濟本質論 經濟學博士 石川 興二

時 論

我が國インフレーションの特質 經濟學博士 小島 昌太郎
日滿農業收益の比較と我が農業移民 經濟學士 八木 芳之助

研 究

勘定學說に就いて 經濟學士 蜷 川 虎三
資本蓄積論 經濟學士 柴 田 敬

說 苑

不況時^{に於ける}中小企業の適應能力 經濟學士 大塚 一朗
ロリヤの觀たる世界恐慌原因 經濟學士 松岡 孝兒

附 錄

新着外國經濟雜誌主要論題

經濟本質論 (一)

石川 興 二

序

人間の社會的歷史的實在 *Menschlich-gesellschaftlich-geschichtliche Wirklichkeit* を共通の研究對象として居る點に於て精神諸科學は自然諸科學より區別せられ、而して經濟學はこの實在の經濟的側面をその研究對象とすることによつて他の精神諸科學より區別される。かくてこの實在の經濟的本質的構造を明にすることは經濟學の基礎を置くこととなるのである。

然らばこのことは如何にし可能であるか。從來經濟の本質を規定せんとした方法に於ては主觀主義と客觀主義との對立が見られたのであるが、眞に經濟の本質を明にせんとせば、この兩者の對立を克服し兩者を止揚するより、具體的な立場に立たなければならぬ。而してこの立場より經濟の本質を明にすることはこの實在の經濟的本質的構造を明にすることとなるのである。かくて先づ經濟本質論の方法について考察しよう。

一、經濟本質論の方法

先づ經濟本質の規定方法に於ける主觀主義と客觀主義との對立を見んに、往年我經濟學界に於

て行はれたる福田博士對左右田博士の論争もこの一例として見る事が出来る。本質規定の出発點を欲望にとるところの福田博士等の立場を心理主義なりと非難せし左右田博士は自らリッケルトの「學の哲學」の立場に立ち全く心理主義を排斥し貨幣概念を以て經濟の本質としたのであるが、福田博士はこの立場を論理主義なりとして難じたのである¹⁾。この前者は欲望なる主觀的條件を經濟の本質的規定の出発點とする點に於て主觀主義であり、後者はこの主觀的條件を全く排し貨幣なる客觀的條件に於て經濟本質を求める點に於て客觀主義であると云ふことが出来る。

この主觀主義の立場に立つて方法的自覺をもつて經濟の本質を規定せんとせし代表的なるものとし、我々はシュプランガー (Eduard Spranger) を舉げることが出来るであらう。彼は其代表作「Lebensformen, 『生の諸型』」に於て經濟を含むところの諸文化域の本質を彼の所謂「精神科學的心理學」の方法をもつて明にせんと試みた。而して此著の初めの二章は諸文化域の本質規定の方法論に當てられて居る。彼はその中に次の如くに述べて居る。

諸精神生活が分化し行く所の基礎的諸方向を決定する爲に二つの方法が提出せられる。吾々は歴史的に與へられて居る客觀的文化から出發して其構成からして個人心の構造に保存されて居るに相違ない所の意義諸方向に逆推理をすることが出来る、或は吾々は個人心の永遠の基礎的諸作用から文化の構成を綜合的に成立せしめるやうに試みることも出来る²⁾。彼はかく區別したる二つの方法の第一を不可とするのであるがその理由とするところは次の如くである。即ち歴史的に與

1) 左右田喜一郎全集、第三卷、一及び二參照

2) Spranger. Lebensformen. 5. auf. 5.28

へられた精神生活は高等な發達段階に於ては若干數の文化域から成立して居る。此等の文化域は肉體の諸部分の如く空間的に相並立して居るのではなく、互に入り込んで一つの構造聯關即活動聯關を形成して居るのである。故にこれ等のものゝ限界は直覺的に感ぜられるが然しそれは大體であつて、より精密な限界を定めることは困難である。加之更に他の困難が現れる。即ち歴史的に與へられた文化諸域に於てはまさしく該文化時代に屬する特殊性が含まれて居る。例へば經濟は貨幣信用經濟であり、科學は實證科學、社會は階級社會であり……法律は何等かの實證的個人主義的法律であると云ふ具合である。かくて客觀的な文化から出發する方法によつて求められたるものは歴史的に制約されたるものとなり眞の本質ではあり得ない。として居る。かくて彼は第二の方法をとるべしとするのである。

即ち「人間は精神的中核に於ては常に同一構造のものである。其文化の程度は精神の發達過程と共に變化するにもせよ……永遠の傾向即ち作用、體驗の永遠の方向が働いて居る。……精神の立場は吾々自身が吾々の内にもつて居る」²⁾かくの如き心的生命の存在論に基いて彼は次の如き認識論に立つのである。即ちこの「生の合成を本原的には甚だ單純な主律の錯綜として理解する爲に先づ孤立化し理想化する zu isolieren und zu idealisieren ことの必要を認めるならば人々は構造的に正しく見ることを學ぶであらう」³⁾かくて彼は先づ諸精神行爲の構造を明にし、その各に對する對象層の構造を見、更に「個性の理想的諸基礎型」を明にせんとした、而しそこには「經濟

29
S. 33
同書、n. S. 34
1) 2) 3)

人」の外に「理論人」、「藝術人」、「社會人」、「權力人」、「宗教人」等が立てられて居る。而してこれ等の諸型の綜合として個人の全構造を把握せんとして居る。

上述のことより既に氣付かれるところの彼の心理學的方法と經濟學との關係はこゝに注意せられるべきである。即ち彼は自ら「抽象的古典的經濟學」die abstrakte klassische Nationalökonomieの方法を取入れることを示めして居る。而してカントが認識の領域に對してなせるが如く「アダム・スミスは經濟の領域に對して」普遍的構造的聯關を打立てたと述べて居る。¹⁾

かくの如くシュプランガーは文化客觀より主觀に歸る客觀的方法を排し主觀より出する心理學的主觀主義的方法によつて經濟其他の本質を決せんとする。然し主觀が自己の心的構造をそれ自身に於て明確に把握することは果たして可能であらうか。このことは彼が文化的客觀より文化的本質の規定を可能なりとしたと同様に不可能である。デイルタイは諸精神科學の對象たる人間的社會的實在は總て「生と表現と理解との聯關」によつて知り得るものであつて、このことは心的物的生命統一體たる個人が自己自身を知るについても同様であることを力説して居るが、²⁾事實我々は外界に於ける客觀的な文化的表現を媒介することなくしては自己の心中に於ける諸文化的基礎構造を明にし得ないのである。然らばこの客觀的な媒介物は如何なるものでなければならぬであらうか。それは複雑なる文化域自體ではなくこの文化域に於て創造せられるところの文化財又は價值自體でなくてはならない。即ち後に詳にするが如く心的生命自體は含著的全體なるも

1) Spranger, Der gegenwärtige Stand der Geisteswissenschaften und die Schule. S. 17 und S. 25.

2) Dilthey, Aufbau. SS. 86-7.

のなるが故にこれをそれ自體として把握することは出来ない。然るにこの生命の創造物又は表現物としての文化財は解明的、部分的なるものなるが故に我々は先づこの文化財を把握規定し然る後これを手引としてこれを生産したところの生自體の構造を把握し得るのである。かゝる仕方によつて各種の文化財からそれを生産する各種の心的構造を明にし得るのである。デイルタイは次の如くに述べて居る。「諸價值を心理的に導出することは今日普通行はれて居るところである。然しこの方法は危險である、何となればかくては、何が價值として妥當するか而して如何なる部門關係が諸價值の間に立てられるかと云ふことが心理學の出發點にかゝはつて居るからである。……その取扱方法はこゝに於ても逆さにされたところのものでなくてはならない。即ち、各の價值附與がその中に包含されて居ることこの表現 Ausdruck から出發し而して價值附與を我物にすることが必要である。然る後はじめてそこに起るところの態度自體を問題とすることが出来る。」¹⁾而もこの價值的表現物自體も、その文化社會の歴史的制約によつて異なるものである。即ち藝術財と雖も各國各時代様々に異り、法律も同様であり、經濟財についても同様である。かくてこれ等文化財又は價值の本質的、特徴を求めると云ふことが必要なこととなる。かゝる方向に向つて經濟の本質を求めた代表的なものとして我々は Edwin Cannan を舉げることが出来るであらう。

彼は『富』を以て *The subject-matter of Economics* 『經濟學の主題』となし、彼の經濟原論には *“Wealth”* 『富』なる題名を與へて居る。従て彼は富なる概念の研究に力を用ゐて居るのである。

即ち彼は先づ“A History of the Theories of Production and Distribution.”『生産と分配の理論の歴史』の第一章に於ては富の概念を歴史的に考察して居る。而して更に彼の經濟原論“*Wealth*”の第一章に於てはこの富の概念を組織的に考察して居るのである。

かくの如く富の概念を學史的に而して更に組織的に考察することは經濟の本質の規定にとつて必要なことである。然しながらかくの如き考察のみを以てして經濟の本質は規定し得るであろうか。我々は富の概念の規定より更に進んでこれを手引きとして實在の經濟的構造を明にしなければならぬのである。富の概念の考察もこの實在の構造の考察を待つてはじめて明確となるのである。而もこの實在の經濟的構造の考察は單にシュプランガーに於けるが如く個人的生の心的構造に止まつてはならぬ。人生なるものは人間の社會的歴史的實在である以上、生の經濟的構造はこの實在の經濟的構造でなくてはならないのである。

經濟の本質規定のかくの如き立場を一言にして云ふならば、生の本質であるところの實踐的構造に即する認識方法によつて經濟の本質を規定すると云ふことである。而してかくの如き文化本質の規定方法の根本的立場を明にしたものとしてデイルタイを擧げることが出来る。

即ち人間の社會的歴史的實在は小は個人の生より大は社會的歴史的生に至るまで總て實踐性を以てその本質として居る。先づ個々人の心的生命について見るにその本質的構造は環境によつて制約されながら而も環境へ合目的に働きかけ以て目的を實現し價值を創造する點に存する。即

ち人間は對象たる實在を認識し、この實在の生に對する價值を評定し、これに基いて目的を立てこの目的實現の方策を定め、以てこの實在に働きかけ目的を實現するのである。かくの如き實踐性は歴史的社會的實在全般の本質であつてデイルタイはこれを「精神的作用聯關の内面的目的性」immanent-teleologischer Charakter der geistigen Wirkungszusammenhängeと呼んでゐる。即ちこの實在は作用聯關であつて「この作用聯關が自然の因果聯關から區別されるところのものは、それが心的生命の構造に従つて諸價值を生産し諸目的を實現することである。而もそれは偶然に又はそこゝに於てではないのであつて精神的作用聯關の中に於て把握(對象把握)に基いて諸價值を生産し又は諸目的を實現することが正に精神の構造なのである。私はこれを精神的作用聯關の内面的目的性と呼ぶ。この下に於て私は一つの作用聯關の構造を基礎として居るところの諸業績の聯關を理解する。歴史的生命は創造する。それは諸財並に諸價值の生産に於て絶へず活動して居る。」とデイルタイは述べて居る。

精神科學の認識方法の本質は、精神科學の對象たる實在のこの創造的本質又は實踐的本質に基礎付けられて居らねばならない。即ちこれを一言にして云ふならばこの實在の生産物又は表現 Ausdruck たる財又は價值よりこれを生産するところの生、Leben たる作用聯關に歸つて行きかくて兩者を内的なる創造的聯關に於て理解、Verstehenするのである。かくて「その對象が生 Leben と表現 Ausdruck と理解 Verstehen との聯關に基ける態度により我々に近づく時にのみ一の科學

は精神科學に屬するのである」¹⁾従つてまた「こゝに於ては人類史に於て感覺的に與へられて居るところのものより、決して感覺に入らないが而も感覺的外的なものに於て自己を完成し表現するものへと理解が歸つて行くのである。²⁾」即ち「生」Lebenなるものは「感覺に觸れ得ず只だ體驗し得るのみのもの」であるが而もそれは生産物として感覺的な外界へ自己を表現することによつて完成する。それ故に我々は先づ外的に直接に把握し得らるゝ感覺界に於ける「表現」を把握し、これより進んで直接に把握し難い「生」を把握するのであつてこれ即ち「理解」である。かくて「精神諸科學はその對象を作用聯關とその創造物に於て有し」て居るのであつて、先づ創造物に於ける構造を明にし、然る後これを手がかりとしてこの創造物を生産する作用聯關たる生の構造を明にし然る後再びこの生の構造より生産物の構造を明確にすることによつてその理解を完ふするのである。

かくの如き認識方法は精神科學の對象たる實在の對象的把握 das Gegenständliche Auffassen に於ては歴史的研究に於てもまた理論的研究に於ても用ゐらるべきところのものであるが、更にデイルタイはこれを文化の本質規定に適切に用ゐて居るのである。それは彼の『哲學の本質』³⁾に於ける哲學の本質の規定についてである。即ちその本質規定の方法は二段より成つて居る。而して第一段は彼が「哲學の本質規定の爲めの歴史的手續」と云へるものであり、第二段は「精神界に於ける位置から理解されたる哲學の本質」と云へるものである。即ち第一段に於ては「哲學と云

1) Dilthey, Aufbau. S. 87.

2) " S. 83.

3) Dilthey, Das Wesen der Philosophie. (Ges. Schrift, V.)

ふ名をもつ諸事實、そしてそれ等の事實に就き哲學に於て構成された諸々の概念から歸納的に哲學の本質の諸相が導き出される」第二段に於てはかくして見出されたる本質的特徴を手がかりとすることによつて哲學なる文化財を生産するところの生の本質的構造が求められ、これより哲學の本質的諸特徴を一の本質概念へ結成した。

かくてこのデイルタイの本質論は、キャンナンに於けるが如く單に生の「表現」又は生産物に止まるものでもなく、またシュプランカーに於けるが如く「生」自體に止まるものでもなく、「表現」より「生」に進み更に「生」より「表現」に至つて「理解」を完結して居るのである。またその生についての考察は、シュプランカーに於けるが如く個人の心的生命に止まるものでなく更に生の社會的歴史的構造にも及んで居るのである。即ち前述せし如く生なるものが人間的社會的歴史的實在である以上、生についての考察は單に人間的心的な生に止まつて居ることは出来ない。

デイルタイはこの本質規定の方法によつて本質的概念構成の陥るところの循環をも克服せんとしたのである。即ちその第一段の「歴史的な方法」なるものは哲學的事實を前提とする。然るに或事實が哲學的事實なることの規定は哲學の何なるかを前提とする。此概念構成に於ける避く可らざる循環より來る不確實性は、人々が何が哲學なるかを考へる時即ち人々が哲學なる一般の表象を作る時に頼りとするところの代表的な諸哲學體系について先づ共通の事態を確立し、これより出發して一步一步哲學の本質的諸特徴を一層精密に規定し行き、更に第二段に於ては生の構造より

これが確證を得、かくて一の本質概念へ結成することによつて克服せんとするのである。この點に於てもデイルタイの方法は正しいのである。

要するにデイルタイの本質規定の方法は實在の實踐的本質に基く實踐的認識の立場に立つものであり最も正しいものであると云はなければならない。私も以下この根本的立場に立つて經濟の本質を規定したいと思ふのである。従つてこの本質論は單に經濟價值の本質論ではなく更に進んで經濟的實在の本質論となる。

かくて私は以下先づ經濟學史上の代表的なる諸體系について經濟的實在の創造物たる經濟價值の本質的諸特徴を一應考察し、然る後この經濟價值の本質的諸特徴を手がかりとして生の經濟的本質的構造を明にしこれより經濟的價值の本質的諸特徴を統一し、以て經濟的實在の本質を明確にすることに努める。而してこの生の考察については人間の社會的歷史的實在の段階的構造に従つて先づ人間の生について、次に社會的生について、最後に歴史的生について考察したいと思ふ。かくて先づ經濟的文化域の創造する經濟的價值の本質的諸特徴の學史的考察よりはじめる。

二、經濟價值の本質的特徴

經濟的實在に於ける價值の本質的特徴の學史的考察はこれを二段に分ち得る。即ち先づかゝる意味に於ける經濟價值は何であるか、次にこの經濟價值の本質的特徴は如何に規定されて居るか

と云ふことである。

經濟學祖アリストテレスは彼の精神科學たる『エティカ』並に『ポリティカ』に於て其後の經濟學の基礎を置いたのであるが、彼は前者の冒頭に於て次の如くに述べて居る。「總ての術及び總ての研究同様に總ての行爲及追求は何等かの善(*eudaimonia*)を目的とするものと考へられる。而してこの理由をもつて善は總てのことがそれを目的とするところのものであると云ふことは正しい。然し諸の目的の間には或相違がある。……醫術の目的は健康であり……經濟學の目的は富である」と述べまた『ポリティカ』の冒頭に於ては「總て國家は何等かの種類の社會である、而して總ての社會は何等かの善を目的として立てられて居るものである、何となれば人間は常に彼が善なりと思ふところのものを得んが爲めに行動するものなるが故である」と述べて居る。かくて彼は「富」なる善又は價值を目的とすところの人間の經濟的生活を個人についてまた家庭について社會について更に國家について考察して居るのである。

同様に經濟學父と云はれるアダム・スミスもまたこの立場に立つて彼の經濟學の著書たる『富國民論』には“An inquiry into the nature and causes of the wealth of nations”『諸國民の富の性質と原因の研究』なる名題を付し、またその中に於て of what is properly called political Economy, or of the nature and causes of the Wealth of Nations (適當に經濟學と云はるゝもの即ち諸國民の富の性質並に研究に就て)と述べて居る。而してその『緒論』に於て「富の性質」を述べ『本論』に於てこの「富の諸原

困」たる實在の經濟的機構を明にして居る。かくて經濟生活の中心をなす價值なるものは「富」に於ても「富」として把握されて居るのである。

資本主義經濟社會の構造を明にすることを以て自己の經濟學の課題としたところのマルクスは、先づ商品¹⁾を以て中心概念となして商品生産社會の構造を明にし進んで商品の發展形態としての資本²⁾を以て中心概念として資本主義的經濟社會の構造を明にして居るのであるが而もこの商品なるものは富なるものゝ資本主義的經濟社會に於ける社會形態たるに外ならぬのである。故に彼はその經濟學『資本論』の冒頭に於て明に次の如くに述べて居る。「資本主義的生產方法の支配して居る社會の富は、巨大なる商品³⁾の堆積として、個々の商品はその要素形態として、現れる⁴⁾」かくて『富』(Wealth 又は Reichtum)なるものが經濟的文化域に於ける文化財又は文化價值であることは一貫して居る。

然らばこの『富』なるものゝ本質は如何に規定されて居るか、次にこのことを考察して見よう。先づアリストテレスについて見んに、彼は富の取得を論ずるに當つて次の如くに述べて居る。「生活に必要であり、家族又は國家の共同體にとつて有用であり而して貯へ得られるところの諸物を自らに用意し支配しなければならぬ。此等の物は眞の富の要素である。何となれば善き生活に必要とされる財の分量は無制限でないからである。」かくてまた「富は家政又は國家に於て用ゐらるべき若干の手段として定義することが出来る。」と述べて居る⁵⁾。即ちこゝに富は人間によつて

1) Marx, Kapital. S. (附點筆者)

2) Aristotle, Poritica. p. 1256 (附點筆者)

3) アリストテレスに於て經濟的生產に従事するものが市民として考へられなかつたことについては別に問題とされねばならぬ。

獲得され、貯へ得られる物財であり人間の眞の生活に役立つ手段であることが明にされて居る。

アダム・スミスはこのアリストテレスによりて定められたる根本的立場に立ち而も更に明確に次の如くに述べて居る。即ち『富國民論』の卷頭第一句に於て曰く「各國民の年々の勞働はその國民が年々消費するところの生活の必要品並に便宜品の總てを其國民に供給する根源であつて、それは常にその勞働の直接の生産物か又はその生産物を以て他國民より購入せるものより成る。」かくてスミスに於ては國民の富なるものは國民的勞働による生産物であり國民の生活に役立つところの物であつて、こゝに富の本質が生産の面より見たる本質と消費の面より見たる本質とによつて明に規定されて居る。

この兩面より見たる富の本質はマルクスに至つて更に明確に規定された。即ちマルクスに於ては消費の側より見られたるその本質は使用價值 Gebrauchswert として、而して生産の側より見られたる本質は價值 Wert として規定された。而してマルクスは富のこの二重の本質的規定を『資本論』の冒頭に於て明にして居るのである。即ちマルクスは『經濟學批判』の『經濟學の方法論』に於て、「經濟學の篇別」について述べ「第一に、一般的な抽象的諸規定が展開せらるべきである、それは抽象的なものだから、多かれ少なかれ總ての社會形態に通ずる」と述べ、第二にブルジョア社會の內面的編制を構成するところの「諸範疇」を論ずると述べて居るのであるが事實マルクスは彼の經濟學たる『資本論』の冒頭に於ては總ての社會形態に通ずるところの富の本質的規定を取

1) Kritik der Politischen Ökonomie. Einleitung. S.S. XLV-XLVI

扱ふて居るのである。而も資本主義社會を『資本論』の當面の對象として居るマルクスはこの富の本質的規定を商品の内容を構成するところの要素として取扱ふて居るのである。即ち前述せし如く、マルクスは商品をもつて富の資本主義社會に於ける社會形態であるとする。故に商品の内には富の本質的規定が止揚され居らねばならぬ。即ち富の本質的規定は商品に於ける止揚的要素 Aufgehobene Momente である。故に第一節『商品の二つの要素、使用價值及び價值』、Die Zwei Faktoren der Ware: Gebrauchswert und Wert に於ては商品についてこの富の本質的規定を明にして居るものであると考へることが出来る。而して事實こゝに於てはアリストテレス並にアダム・スミスによつて規定されたる富の本質的特徴が更に明確に規定されて居るに外ならない。

先づ使用價值は消費の側より見たる富の本質であつてマルクスはこれについて次の如くに述べて居る。即ち「ある物の有用性、即ち人間の何等かの種類の欲望を充たす屬性は、その物を使用價值たらしめる。」即ち商品としての富も使用價值をその本質的要素として居るのである。今このことをアリストテレスの語によつて云ふならば富は「生活に必要であり……有用なる諸物である」またスミスの語にて云ふならば富は「生活の必需品並に便宜品」である。

更に富なるものは生産の側より見られねばならない。即ちアリストテレスの語を以てすれば人間によつて獲得される物であり、またスミスの語によれば「勞働の生産物」である。マルクスはこの生産の側より見られた本質を價值 Wert として規定した。即ち彼は次の如くに述べて居る、

「今吾々が商品體の使用價值を度外視するならば、商品體には一つの屬性——勞働生産物たる屬性が残るばかりである。」¹⁾また曰く「一つの使用價值即ち財が價值をもつのは、抽象的なすなはち人間的な勞働が、その中に對象化され又は物質化されて居るからに外ならぬ。」かくて抽象的な人間的勞働が經濟財に於て對象化されたところのものか富の屬性たる價值である。

このマルクスに於ける「抽象的人間的勞働」なる語は一見特殊なものに見えるのであるが、スミスに於ける勞働と本質的に異ならないのである。このことはマルクスの次の語より明である。即ち曰く「アダム・スミスは、富を創造する活動の總ての規定性を放棄し、工業勞働でも商業勞働でも農業勞働でもなく、その何れたるを問はず、勞働一般 *Arbeit überhaupt* を規定したのであるが、これは彼の驚くべき進歩であつた。富を創造する活動の抽象的な一般性ととも、今や我々は更に、富として規定される對象物の一般性を、生産物一般 *Produkt überhaupt* を、すなはち茲でもまた勞働一般——しかし對象化された過去の勞働としての勞働一般——を、得たのである。」かくてスミスが富の本質的特徴の一とした「勞働の生産物」と云ふことがマルクスに於ては單に價值として云ひ現らはされたのである。この意味で「價值」は勞働價值と云ひかへることが出来る。かくてマルクスに於ては富の本質的特徴は使用價值と勞働價值との二重性として規定されたのである。

今以上に於て明にされた富の本質的特徴を要約するならば富は物的價值であつて、使用價值と

1) 同書 *Einleitung S.S. XXXIX-XL*

勞働價值との二重性を有して居るものである。¹⁾

これは經濟的文化域の生産する價值としての富の本質的特徴の最も基本的なるものである。富の概念を更に精密に規定すると云ふことはこの基本的特徴を土臺として一步一步なされねばならないのである。

こゝには只だキャンナンの富の概念に關説して、幾分これを詳に規定しやう。即ち彼は「經濟學の主題たる富」は something possessed or enjoyed by humanbeing (人間によりて所持され又は享受されるあるもの) であるとする。かくて彼の富の概念は富の主格たる人間の側よりこの主格が所持又は享受する客體の側とより規定し得る。而して先づ主格の側より見れば經濟學の主題たる富の概念は國民の富をも社會内部の階級の富をもまた個人の富をも意味するものであるとして居る。このことは我々にとつても意味あるものである。即ち以上に於ける我々の富の考察は未だ富の主格の側よりはなされなかつた。然し我々は富を手引として人間的の、社會的の並に歴史的の生の經濟的構造を考察せんとするのである。故に富の概念に於ても個人的富、社會的富、國民的富等の概念が明にされなければならない。即ちこれ等の富の概念に相應してこれに對應する生の經濟的構造が明にせられ得るのである。

更にキャンナンは客觀の側より富の概念を特に精密に規定して居るのであるが、これ等の點は嘗て私が本誌に詳にしたところであるから²⁾こゝには一一これを述べない。只だ彼の富の概念を要約

1) アリストテレスに於ては使用價值の方が、これに反してマルクスに於て勞働價值の方が高調されたることについては後に生の經濟的構造の考察に際して述べる。

2) 本誌第十卷第一號第三號『キャンナンの富の概念に就て』

すれば次の如くである。

それが國民全體としての人間にせよ、階級としての人間にせよ、又は個人としての人間にせよ或人間の或期間に於ける富とは、その人間が、その期間内に於て、貨物及び勤勞から享受したる満足より、その人間が、其期間内に於て、かゝる積極的満足を得る爲に受けたる消極的満足即ち苦痛を控除したものである。

この富の概念に關するキャナンの論に於て富に關する「時」の概念について述べられて居るところは甚だ有益である。即ち彼は富は一時點に於ける「資本的富」Capital Wealthであつてはならないのであつて一定期間に於ける「收入的富」Income Wealthでなければならないとするのである。これ富なるものは人間生活に役立つ手段であり、而も人間生活に役立つところのものは前者でなく後者なるが故である。

然しながら彼が物財以外更に勤勞を以て經濟的の富とすることは正しくない。彼は勤務をも富とすべき理由として次の如くに云ふて居る。即ち生産的勞働も不生産的勞働もその生産するところは共に效用であり、社會の人々が生活の便宜又は快樂を得る資源である。故に生産的勞働の結果たる物質的のもの即ち物財を年々の生産物とするならば、非物質的なる勤勞をも年々の生産物に加ふべきであつて、單にその效用が前者に於ては永續的のものであり、後者に於ては消滅し易きものであると云ふ理由によりて、勤勞をこれより除外するは不合理である。とするのである。

かくの如く彼が富の物質性を重んぜざることは甚だ不可である。既にアリストテレスも富は貯積され得る物であるとしそれ以來ミス、マルクス等に於ても富は明に物質性に於て把握されて居るのである。即ち經濟的價值なるものが物質的價值であると云ふ點がこの價值を諸他の文化價值より區別する根本的特徴となるのでありまたこの價值を手引きとして生の經濟的構造を生の他の文化的構造より區別せしめる根本的特徴となるのである。このことは以下に於て明にされる。同様にしてまたキャナンが富なるものをもつて外界の物そのものでなくしてこの外界の物を手段としてそれより得らるゝ效用又は満足 *Utility or Satisfaction* でなければならぬとしたことも正しくないのである。

以上に於て私は經濟的文化域に於ける價值又は財の本質的特徴を一應明にしたるが故に、次にこれを手引きとして生の經濟的構造を明にし更にこの生の經濟的構造より經濟價值の本質を更に明確にしなければならぬ。かくて價值と生との内面的統一によつて經濟的實在の本質を具體的に明にすることにつとめよう。